

## 「めづらし」／「あたらし」

—中世和歌における価値判断の変遷と独創性の出自

土田耕督 (大阪大学)

本発表は、中世和歌における「めづらし」という概念の変遷を跡づけることによって、芸術の価値を勘案するうえで重要な〈独創性〉が現出する回路の、一つのモデルを提示することを目指す。

第八番目の勅撰集『新古今和歌集』(1205年成立、以降改訂増補)を和歌表現の到達点と見なす考えは、その直後を生きた歌人たちにおいて、すでに確固たるものとなっていた。新古今和歌が追求したのは、古の和歌の「及ばぬ高き姿」(藤原定家(1162-1241)『近代秀歌』)である。この尚古的理念の達成のために、種々の実験を繰り返しつつ先鋭化されたのが、「詞は旧きを慕ひ、心は新しきを求め」(同)という二律背反的表現意識であり、古歌を〈再利用〉する詠法であった。古歌から詞を摂取しつつ、「心」を〈更新〉してゆくこと、これが新古今和歌の開拓した道である。

心が更新されているか否かは、歌合の場などにおいて集団的に判断されていた。しかしここでは、詠出内容についても詞遣いについても、「あたらし」という語は否定的評価を示す。「あたらし」という判断は、歌に詠まれるべき「本意」から外れ、〈新奇〉な詞を用いる歌に下される。つまり、希求されるべき〈新しさ〉は、「あたらし」によって包括されるものではない。ここで発表者が着目するのが、「めづらし」という語である。「めづらし」とは、共有される過去の表現を基準とし、それとの差異に見出される価値にほかならない。

この価値判断の内実は、新古今時代以降、変容を蒙る。ポスト新古今時代を生きた歌人たちの存在意義は、自らの詠歌行為を新古今和歌にいかにか接続するかにかかっていたといつてよい。この世代の追求する「めづらし」は、心の〈新しさ〉のみならず、言葉の配列にまで適用される。つまり、表出内容は常套的であっても、それをあらわす言葉の意表外の組み合わせに、価値が見出される。これに伴って、価値を創出し終えた言葉の配列の〈再利用〉を禁ずる言説が出現する。すなわち、定家の息、藤原為家(1198-1275)が『詠歌一躰』において設定した、「ぬしぬしある事」である。

「めづらしき」言葉の配列を追求した帰結としての「ぬしぬしある事」は、後に「制の詞」と呼ばれ、和歌表現を制限するものとして反発を招くことになる。今川貞世(法名了俊、1326-1418頃)は、「新たな只言」、新たに詠み出だされた俗語をこそ「めづらし」と把握する。つまり、「めづらし」は〈新奇・奇抜〉という現代語に近い意味を付与されるに至る。新奇な俗語は、歌語と対比され、和歌において忌避されるものであった。この事態は、「めづらし」が「あたらし」にとって代わられたことを示唆している。

「めづらし」が、〈新奇・奇抜〉という現代的意味へと転じる過程において、過去を基点とした差異は和歌から零れ落ちてゆく。ここにおいて、〈新しく〉詠出された差異なき表現に価値を見出す、〈独創性〉重視の萌芽を見出すことができる。